様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３７０５４４

研究課題名（和文）体言系複合語アスペクト表現の文法史研究

研究課題名（英文）A Study about Aspectual Expression of Indeclinable Compound Word

研究代表者
福沢　将樹（Hukuzawa, Masaki）

愛知県立大学・日本文化学部・教授

研究者番号：３０３３６６６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：「到着する寸前」や「結婚寸前」といった「-寸前」という表現を例として、ある種の複合語または句について研究した。これは一種のアスペクト（時間的）表現である。これは、「用言」と異なり、一見、活用しない「体言」のようである。日本語のアスペクト表現は、「-ている」のように、従来活用語（特に動詞型）だと思われてきた。しかし、活用しない体言型のアスペクト表現も、現代日本語には多数存在する。これら活用しないアスペクト形式は、実は、助詞や助動詞を下接することによって、まるで動詞のように活用することができる。そういうわけで、動詞と名詞の区別について再考する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来「アスペクト」と呼ばれてきた表現形式は、「-ている」「-てある」など用言型（特に動詞型）の形式に局限されてきたが、「-中（ちゅう）」「-寸前」など体言型のものを視野に入れることにより、アスペクト表現同士の使い分け、その歴史的変化、或いは活用の体系、「1単語とは何ぞや？」など様々なテーマにおいて見直しを迫るものとなり、新たな研究テーマの広がりを提供することができる。またその応用として、アスペクト表現の働きから物語の叙述を分析したり、言語哲学、言語心理学などへの発展も期待できる。

研究成果の概要（英文）：I have researched some compound words or some phrases in Japanese, i.e. "toutyaku-suru sunzen", "kekkon-sunzen"; they are some kind of aspectual (temporal) expressions. They are, however, indeclinable words ("taigen"), not declinable ("yougen"). Japanese aspectual forms have been considered declinable, especially verbal forms(i.e. "-te iru"). But, the contemporary Japanese language has not only declinable aspectual forms, but also an amount of indeclinable ones. These indeclinable aspectual forms can, however, be declinable, by adding some clitics; just as verbal forms. Therefore, we have to reconsider the distinction between Verb and Noun.

研究分野：国語学

キーワード：文法　語構成　アスペクト　接尾語　接語　助動詞

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)古代日本語のアスペクト形式の表す意味と、現代日本語のそれとは、一続きに繋がらず、まるで別言語であるかのようである。既に知られていた点としては、①「たり」から「た」へ変化する過程で意味の変化や上接語の変化があった。②「ぬ」「つ」「たり」「き」「けり」等の接続しない基本形（無標形）の表す意味が、古代と現代とで大きく異なっていた。③意味論の観点では、基本形（無標形）には古代語と現代語とで「限界性」の違いがあった。④現代語には新たに「～ている」「～つづける」等の助動詞相当の形式（補助動詞等）が発達している。しかし、上述の諸形式以外にも、語構成論の観点で複合語（に似た）表現（「～中」「～後」「～寸前」「～っぱなし」等）が現代日本語で発達しつつあることについては見逃されていた。後者のような表現は、形式上は名詞に似ている。しかし、アスペクトと言えば動詞相当の概念であるという思い込みがこれまではあったため、名詞ふうの形式をアスペクト形式の一種と見なすことが躊躇われてきたものと思われる。

(2)また、一見名詞のように見える「丸腰」「抜群」等の語群について、これが名詞ではなくむしろ形容詞（いわゆる形容動詞を含む）の一種であり「第三形容詞」と呼ぶ村木新次郎の説がだいぶ人口に膾炙してきた。しかし名詞のような形をした動詞については、①いわゆる「サ変動詞語幹」の大部分、②「歩き」「作り」など連用形転成名詞、③その他の複合語（「崖崩れ」「手作り」など）、のみが重点的に研究され、それ以外にも名詞のような形で実質動詞であるという類型が存在するということはあまり取り上げられてこなかった。

(3)広く現代日本語には、臨時の複合語のようなものを形成する接尾語・接頭語が多い。例えば「～自ら」「～自体」等は「とりたて助詞」に近いとするトルヒナ アンナによる指摘は 2015 年に発表され、本研究課題の開始当初にはまだ存在しなかったが、潜在的にはありえた。しかしほとんど取り上げられてこなかった。その理由として考えられることは、このようなものを「助詞」のカテゴリーに組み入れるには、あまりに語彙数が多くなりすぎ、また漢語由来のものを「助詞」と見なすことは、現代日本語話者の直観に合わなかったものと思われる。

２．研究の目的

(1)日本語のアスペクト体系を記述する上で、「～ている」「～てある」等の状態動詞系アスペクトとは別に「体言系アスペクト」の概念を立てる。後者は「～がちだ」「～っぱなしだ」「～中（ちゅう）だ」などのことである。またこれと並行して体言型接語の品詞分類を見直す。即ち「旅行中（だ）」は本当に「体言」型と言ってよいのか、実は「用言」の一種なのではないかという見直しである。

(2)古代日本語と現代日本語の違いを、言語類型の違いとして位置づける。例えば接辞（助動詞）優勢な言語と接語（複合語の一部）優勢な言語といった言語類型を立てられないかという仮説を論じる。また当該諸形式を「接辞」の範疇として見るべきか「接語」の範疇として見るべきかという問題もまた同時に問題とする。

３．研究の方法

(1)主として現代日本語に対しては、書き言葉コーパス資料を用い、複合語の造語成分の実例収集と、その理論的考察を行う。歴史的変化を探る上ではジャンルの違いにも留意しつつ資料を選択し、用例の分析を行う。
実際には、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）を用いて「寸前」の用例を検索し、その上接語・下接語および活用と、統語的特徴を分析した。

(2)用例の分析においては、従来の学校文法における６活用形や品詞分類の枠組みに囚われず、実際に即した統語的用法に沿ったものとする。また意味分析においても、歴史的変化をうまく記述できるよう工夫する。

４．研究成果

(1)現代日本語の「～寸前」という造語成分（接語）は、盛んに複合語（に近いもの）を形成するが、その用法の分類を行い、その品詞論的性質を分析した。この複合語には「句の包摂」と呼ばれる統語論的な不自然さも存在する。例えば、「結婚寸前」という形態は、一見すると 4 文字の複合名詞であるかのように見える。しかし、「女王と結婚寸前」という語法になると、「女王と～」は「結婚」に係るのであって「結婚寸前」という名詞に係るわけではない。つまり、複合語の一部分（結婚）が他の要素と係り受けの関係を持ち、まるで「女王と結婚」という「句」全体を「～寸前」が包んでいるようである。これは意味と形が合っておらず、一見困った問題として取り上げられてきたが、それは以下のような分析で解消できるものとした。①「寸前」は、漢語要素であるとはいえ、「助詞」の一種と位置づけられる、②それ自体は語形変化しないものの、「だ」「の」などを下接した全体で見れば「動詞」として位置づけられる。このような造語成分は現代日本語の中にはおびただしい種類が認められ、それぞれの語彙についての意味分析は行う余裕がなかったが、今後の展望となる。

(2) 「の」が下接しても「動詞」である、ということを主張する。というのは、例えば連体修飾のとき「〜の」の形になるのは、確かに一見「名詞」という品詞の特徴に見える。しかし複合語全体ないし句全体としては「動詞」述語と思われるものの述語の中にも連体「〜の」になるものが見受けられる。例えば「女王と結婚」（する）という動詞句に「〜寸前」という接語を下接させると「女王と結婚寸前」という形態になる。これを活用させると「女王と結婚寸前の」のように「〜の」をとる。しかしだからといって、「結婚寸前」を「名詞」と捉えてしまうと、当該例の統語的性質を見誤ることになるであろう。なぜなら「女王と〜結婚」のように、項として「〜と」格を取ることは、「名詞」の性質としては認めにくく、むしろ「動詞」の持つ特徴に近いからである。そういうわけで、現代日本語の「動詞」活用には、「五段」「上一段」「サ変」等と並んで「ノ」活用とでもいうべき一種を立てるべきことを主張した。こうした「ノ」活用は、近年は「形容詞」の一種としての「第三形容詞」（「丸腰の」「抜群の」等）によく似たものである。なお日本語の動詞と形容詞を区別する必要の薄いことは松下大三郎をはじめ昔から指摘されている。

(3)状態動詞系（用言系）アスペクト「ておる」「ている」「てある」の研究史において、その意味変化の先行研究にはある種の不自然さがあることを指摘し、それを解消すべく、従来「動作の継続」とされてきた意味概念を 2 つに分けることにより、自然な推移として描くことができることを指摘した。即ち、従来は中世後期の「ている」「てある」に「動作の継続」の用法があったことが指摘されていたが、しかし一方で、中世末期の資料では「ている」「てある」に「動的な動作継続」の確かな例が非常に稀であることも指摘されており、近世以降は再び珍しくなくなる。つまり研究史を辿ると、一度死滅寸前に陥った用法が再び復活したということになる。これはありえないとは言わないまでも不自然に見える。そこで、中世後期の当該例周辺を再検討した結果、以下のような見解に至った。即ち、従来の「動作の継続」を「事態継続」と「期間継続」の 2 つに分けることにより、従来「動作の継続」とされてきた用例の中は「期間継続」の例が多数であり、「（狭義の）動作継続」（「事態継続」の中の一種）は中世には却って稀であったという見通しができた。更には「（狭義の）動作継続」の意味を専門に表す形式というのは、世界の言語に普遍のことではなく、言語によっては、かつては別の意味を表していた形式が歴史的発展の過程でこの意味を獲得してきたという見通しも得られた。今後の展望としては、より資料の幅を広げて再確認し、また、他言語のより詳しい記述や、歴史的発展についても知見を深める必要がある。

(4)その他、日本語のテンス・アスペクトを表す形式の歴史的変化の概観を記述した。「ぬ」「つ」「たり」など用言系アスペクト形式は、その元の意味として「過程」（「（ゆっくりした）変化」「持続」「状態」など）であったものが、「変化の実現」（「終結」「起動」など）へと変化する傾向について述べた。今後の展望としては、体言系の形式についても同様の傾向か、他の用言系で表せなくなった意味を埋めるという説明でよいのか、或いは別の傾向も見て取れるのかを明らかにする必要がある。

(5)テンス・アスペクト関係の表現が用いられる場合について、具体的な文章において文章論的に整理した。小説の「地の文」の中には、〈叙事〉〈叙景〉そして〈叙情〉だけでなく、〈注釈〉など草子地も用いられる。テンス・アスペクトが問題になるのは、多くは〈叙事〉〈叙景〉の表現であり、〈叙情〉も半分くらい問題に含まれるが、〈注釈〉は大きく異なるので、両者の区別をした上で〈注釈〉の物語論的および文法論（品詞論）的側面を考察した。本研究課題としては、ふたたび〈叙事〉〈叙景〉の方面についての考察を深める必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2 件）

①福沢将樹「草子地を再考する―〈注釈〉という機能を中心に―」『表現研究』108 号、査読無（シンポジウム活字化）、2018 年、pp. 29-38

②福沢将樹「時間を表す接尾語について―「寸前」を中心に―」『愛知県立大学日本文化学部論集』8 号、査読無、2017 年、pp.左 73-87

〔学会発表〕（計　2 件）

①福沢将樹、「読者／聞き手を再考する――玉上「三人の作者」「二種の読者」論から――」物語研究会、2019 年

②福沢将樹、「草子地を再考する－〈注釈〉という機能の広がり－」表現学会、2018 年

〔図書〕（計　3 件）

①福沢将樹（青木博史／小柳智一／吉田永弘編）『日本語文法史研究 4』ひつじ書房、2018 年、pp. 135-154

②福沢将樹（日本語学会編）『日本語学大辞典』東京堂出版、2018 年、pp.665-667

③福沢将樹（青木博史／高山善行／小柳智一編）『日本語文法史研究 2』ひつじ書房、2014

年、pp. 221-232

〔その他〕
ホームページ等
①福沢将樹「古典文法では過去や完了の助動詞がたくさんあるのに，現代語ではなぜひとつしかないのですか」、https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-68/、国立国語研究所「ことば研究館」ことばの疑問：よくあることばの質問、2019 年

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。